

「神の声」

(ヨハネによる福音書 1:6-8, 19-28)

ヨハネによる福音書は、受肉した御子を「光」にたとえます。そして、洗礼者ヨハネはこの光について「証し」し、「すべての人々が信じるように」なるために叫ぶ「声」として登場します。人々は「あなたは何者か」と再三洗礼者ヨハネに問いかけます。しかし彼はいずれの問いかけにも否定形で答えます。彼は人々の期待や予測の間違いを鮮明にし、その上で、「わたしは荒れ野で叫ぶ声である。」と告白し、自らが「声」に過ぎないとはっきり伝えます。洗礼者ヨハネの任務は、主の到来に備えるようにと告げる「声に」徹することだったのです。そうすることで、人々はこの「声」が指し示す「来たるべき方」の方へと向くようになります。

けれども、洗礼者ヨハネが人々の期待や予測を否定したために、人々は「ではなぜ、あなたが洗礼を授けるのか」と問いかけることになります。洗礼者ヨハネはその問いに、「わたしは水で洗礼を授けるが、あなたがたの中には、あなたがたの知らない方がおられる。」と答えます。先主日読まれたマルコによる福音書のように、他の福音書では「わたしは水で洗礼を授けるが、来たるべき方は霊で洗礼を授ける」というように、主イエスの「聖霊による洗礼」を伝えていますが、ヨハネによる福音書はそのことについて一切触れません。ヨハネによる福音書は、「水の洗礼」と「聖霊による洗礼」の対比よりも、「わたしの後から来られる方」の力強さ、偉大さを伝えることに目的があるからです。洗礼者ヨハネが、奴隷の仕事である「履物のひもを解く」資格もないと述べるその方は、「あなたがたの知らない方」、つまり人間の経験や知識を超えた方なのです。その方を「証しする」ことこそが、洗礼者ヨハネの使命だったのです。彼が自分ではないと否定し、むしろ

「声」となって指し示した方は「わたしの後から来られる方」であり、「あなたがたの中に」立っている方であり、洗礼者ヨハネが「その履物のひもを解く資格もない」ほどの方なのです。

来たるべき方を証しした洗礼者ヨハネですが、彼はまだ主イエスに会ってはいません。けれども、彼は主イエスを知っています。なぜなら洗礼者ヨハネを遣わした神によって知らされたからです。神によって教えられたからこそ、彼は「来たるべき方」の本質を指し示し、すべての人が信じるように呼びかけることができました。それは神から伝えられた「声」だったのです。そうであるなら、その声が指し示す方、その本質は二千年後の今を生きるわたしたちにも届く「声」でもあります。神がわたしたち人間に求めているものは、この神からの「声」を聞く耳であり、神の業を見る目です。わたしたちが信じる「光」は二千年も前に地上に現れました。しかし、この「目」と「耳」に恵まれていれば、わたしたちは今、その真実を見聞きすることができます。洗礼者ヨハネが主イエスに会わずして主イエスの本質を知り得たのと同じように、です。そこに、わたしたちはその出来事を「証し」するものとされるのです。

夜の闇が深まるこの期節。来るべき方がお生まれになる家畜小屋の灯りが、いよいよ薄っすらと見えてきました。